

最古の茶書『茶経』の著者・陸羽の思想とその伝播

2026年4月11日

於：武田科学振興財団杏雨書屋
静岡県ふじのくに茶の都ミュージアム
岩間真知子

【『茶経』とは】

- ・中国および世界で、**現存最古の茶書**。後世の中国茶書の構成は、『茶経』に基づく。
唐代・上元元年（760 陸羽27歳）ころ成立。その後、改訂を加えたと考えられる。
- ・**陸羽**（733-803）字は鴻漸,一名疾,号は桑苧翁,竟陵子etc。復州竟陵（湖北省天門）の人。
安史の乱後、陸羽は浙江省湖州に移り、そこで『茶経』を著した。
- ・陸羽の**著作** 『陸文学自伝』ほか、文・詩・連句などが残る。
『茶経』上中下三巻 十章
上巻 一之源（茶の起源、茶文字、植物的特性）
二之具（製茶道具）
三之造（製茶方法）
中巻 四之器（茶を煮て、飲む茶器）
下巻 五之煮（茶の煮方、水や炭の選び方）
六之飲（美味しい茶の飲み方）
七之事（茶を記す文献資料集）
八之出（茶の産地とそのランキング）
九之略（茶を飲むときに省いてよい茶器）
十之図（茶経全文を白絹に書き、座隅に置くと指示）
- ・『茶経』の伝本 現存最古の『茶経』は、南宋の版本・叢書『百川学海』（1273年）所収本。成立後、約500年を経過した形。次の現存刊本は、明・弘治14年（1501）百川学海本。初版本から約230年後。この間の『茶経』の状況は未詳。萬暦年間に多数の『茶経』が刊行される（沈冬梅『茶経校注』中国農業出版社 2006年）。
- ・**百川学海**は「百川海に学びて海に至る」という言葉に由来し、多数の書物をひとつの叢書にまとめたもの。**中国最初の叢書**とされ、後世、繰り返し刊行。**中国国家図書館本**は南宋の刊本とされる。日本の**宮内庁書陵部所蔵本**は**明刊本**とされているが、同版ではないか、との説がある。

【杏雨書屋蔵『茶経』（嘉靖壬寅（21- 1542年）序 竟陵本）の重要性】

- ・『茶経』として**最初の独立刊本**（単行本）。陸羽の故郷・竟陵において、孤児であった陸羽が育てられた龍蓋寺の住持・真清らが制作。その後の独立刊本の祖本。『茶経』本文は、百川学海本によるが、○を付して増注。
- ・布目潮瀧「杏雨書屋蔵明嘉靖竟陵本『茶経』について」（『東洋芸林論叢：中田勇次郎先生頌寿記念論集』平凡社 1985年）

嘉靖18年（1539年）に嘉靖帝が、竟陵の近くの出身地・鄧（湖北省鐘祥県）に行幸された記念として、陸羽が育った龍蓋寺の住持・真清らが百部刊行。本書の『茶経』の原文は『百川学海』に基づく。①魯彭叙 ②茶経本文 ③伝（新唐書陸羽伝と童史氏承叙曰）④水弁（煎茶水記の節略本・大明水記・浮槎山水記）⑤茶経外集 ⑥陳師道・茶経序 ⑦皮日休・茶中雜詠序 ⑧童内方與夢野論茶経書 ⑨吳旦の跋 ⑩汪可立の嘉靖壬寅の後序。

茶経外集に龍蓋寺（陸羽の育った寺、のちの西塔寺）関係の詩34首を収める。詩には萬曆13年以降の詩も収録されるため、同書の刊行は嘉靖21年（1542）ではなく、**萬曆13年（1585）以降の後刷り**。日本に伝存の和刻本（春秋館本・宝暦本・天保本）は鄭燧校本の模刻だが、その祖本が竟陵本。

- ・童正祥「竟陵版『茶経』的善本形態与出版源流」『湖南农业大学学报(社会科学版)』第13卷第3期 2012年6月

現存する竟陵本は、北京・中国国家図書館、北京大学図書館、台湾国家図書館、杏雨書屋のみ。竟陵では、清朝まで4回にわたり『茶経』を刊行。

- ・張雅琴「魯彭と明嘉靖景陵本『茶経』の刊刻」（魯彭与明嘉靖景陵本《茶经》刊刻 『陆羽研究集刊』2019年12月）

明・嘉靖景陵本『茶経』（1542年）は、現存する最初の単行本『茶経』で、後世のすべての単行本『茶経』の祖本となった。布目潮瀨氏の研究（1998年）は本版本の位置づけと、日本に伝存する和刻本（春秋館本・宝暦本・天保本）は鄭燧校本の模刻だが、その祖本を竟陵本とした。刊刻事業の主宰・編集の中心は魯彭と童承叙であった。嘉靖帝の南巡（1539年）は影響を与えたが、刊刻年（1542年）との時間差から、直接的契機は、監察御史・柯喬による「觀風竟陵（地方文教振興）」政策の1つであろう。明・嘉靖景陵本は、龍蓋寺を拠点に僧・真清の写本、魯氏家蔵本、童承叙の校訂など複数資料を統合して成立。本文は『百川学海』本に、30か所以上の改訂と新注を加える。付録（陸羽伝・外集・書簡類）は、童承叙『嘉靖沔陽志』の陸羽関係資料を再編した構成。刊刻完成直後、吳旦が感銘を受けて再刻した「吳旦本」が生まれ、内容はほぼ同一だが序を省略。それが台湾本（北京大学本も同じ）。

* 童承叙（1495—1542）は翰林院侍講として、嘉靖帝（世宗）に講義。

- ・杏雨書屋『茶経』収蔵の経緯

本書が杏雨書屋に収蔵される経緯は、挟まれた紙に「昭和一二、一〇 東京 文求」とあるため、武田家が**昭和12年10月 東京の書店・文求堂より購入した**と推察される。文求堂は文久元年に創業の書肆。当時は、東京外国語学校で中国語を学んだ田中慶太郎の経営で、漢籍・中国関係の人々に内山書店同様に知られた書肆。田中の尽力で、郭沫若の書籍を多数刊行。日中交流に成果を出した。

杏雨書屋蔵の竟陵本『茶経』は現存する最初の単行本『茶経』で、増刷後の姿をとどめるものは本書のみ。

【最古の茶書『茶経』の著者・陸羽の思想とその伝播】

・陸羽について 陸羽の伝記

- (1) 「陸文学自伝」（『文苑英華』『全唐文』に収録）
- (2) 『因話録』（唐・趙璘撰）
- (3) 『封氏聞見記』（唐・封演撰）
- (4) 『唐国史補』（唐・李肇撰）
- (5) 『大唐伝載』（唐・『太平広記』巻201に収録）
- (6) 『新唐書』（宋・欧陽修 等奉敕撰）
- (7) 『隆興仏教編年通論』（南宋・石室祖琇撰）
- (8) 『唐才子伝』（元・辛文房撰）

・陸羽の伝記（『陸文学自伝』ほか）

陸羽は孤児として、竟陵（湖北省天門）の寺院で育てられた。育ての親の智積禅師は仏教に導くが、儒教を学びたいと寺院を抜け出し役者となる。同地に赴任してきた官吏たちに才能を認められ学ぶ機会を得る。

安史の乱を避け、浙江省杭州に移居し、そこで文人や僧侶・皎然らと身分を超えた交友を築く。自らの容貌や吃音といった欠点も大文学者と同じ、また『論語』の中で、狂人をよそおい政治に関わることは危険だと孔子に注意した接輿に似ると言われたことを誇りとした。

自らの詩文は諷諭するものが多いと記す。ここでいう「諷諭」は諷諭詩のように、政治の腐敗、民衆の苦しみ、社会の不条理を風刺し、改善を訴える社会派的なものである。いわゆる隠遁生活の楽しさや悠々自適な生活を詠う閑適詩とは対照的なもの。

杭州で顔真卿が連句の工具書『韻海鏡源』360巻を編纂し、陸羽はその編纂作業に加わる。顔真卿の建てた亭に、三癸亭と命名。そのことを顔真卿は文章に残し、皎然も詩に記す。

晩年の動向は、明確ではない。各地を巡り、湖州で没した、あるいは故郷の竟陵に戻り、龍蓋寺で育ての親・智積の供養をして没した、との説がある。

【『茶経』に見る思想】

(1) 茶は南方の嘉木なり

『茶経』冒頭の言葉。中国古代の文人は〈嘉〉で特定の植物を称賛し〈君子の人格〉に喩えた（屈原『楚辞』第八篇『橘頌』）。陸羽はこの伝統を継承し、茶を南方で育つ嘉木と呼び、茶に単なる飲料を超えた〈品德〉を付与した。愛国詩人・屈原の『楚辞』に倣うことで、戦国時代の大国であった楚に生まれた自身の南方楚人としてのプライドを表現した。

(2) 精 と 儉「茶之爲用、味至寒、爲飲、最宜精行儉徳之人。」（一之源）。

・「茶の効用は味が極めて寒のために、飲み物として最も精行儉徳の人によろしい」として、陸

羽は茶は万民にとって良い飲料であるけれども、特に「精行儉徳の人」に良いと明示。

*「精行」について、高橋忠彦氏は「徳行として〈精行〉の語を用いる例は古くなく唐代でも一般的ではない」とする。その「精行」を用いたところに、陸羽の思いが窺われる。

・『茶経』一之源「造るに精」と作り方が「精」であることを必須とした。「好」でも「良」でもなく「精」とする。『茶経』五之煮で、茶の気を「精華之氣」茶の美味しさの頂点を「精英」と表現。妥協のない質への追求。

・宋の政治家・文人の歐陽脩が陸羽を継承し、宋の蔡襄『茶録』後序の冒頭に「茶は物の至精たり（茶為物之至精）」と書く。

・明の張源は『茶録』（張伯淵茶録）で「品泉 茶は水の神、水は茶の体。真水にあらざれば其の神を顕わすことなく、精茶にあらざればなん其の体を窺わん」、「茶道 造る時はこまかかに、おま蔵むる時はかわ乾燥かし、泡ずる時はきよ潔くせよ。精燥潔に、茶道は盡きぬ」として、茶が精であることを求めた。

・許次紆は『茶疏』で「精茗蘊香」「精茗名香」などと記述し、茶の良いもの、良く作られた茶を「精茗」とした。陸羽が理想とした茶は「精」という思想が受け継がれている。

*「儉徳」『茶経』一之源に、茶は「精行儉徳の人」に最も宜しいもの。

・五之煮に「茶の性は儉、宜しく広むべからず。」とする。

・七之事に、儉の生き方を実践する陸納（衛將軍の謝安を迎えても、茶果のみで応対）、宴会でも茶と7皿の軽食のみを出す桓温の所業を紹介。

・陸羽は茶具を創生するが、いずれも身近な木・鉄などの材料を用い、金銀など高価で華美なものを使おうとはしていない。

・布目潮風氏は「儉」こそ「陸羽茶道の精神」と言い切る。

(3) 茶人負えい籬以採茶

・『茶経』二之具「茶人籬（背負い籠）を負い以て茶を採る」

陸羽は『茶経』の中で、ここでただ一回「茶人」の言葉を用いる。陸羽の理想とする「茶人」は栽培から飲用まで、全工程に愛情を注ぐ人である。茶生産が盛んとなるにつれ、栽培・茶摘み・製茶・茶を淹れ飲むという過程は担い手が分かれ、宋代以降の茶人の概念は製茶された茶を淹れて味わう人となっていく。工程が分化しても、どの段階でも茶に愛情をもって細やかに丁寧に扱わなければ、良い茶を美味しく飲めるようにはならない。いずれの段階でも、茶人として「精」であることは要求され、時代と共に茶人の概念は変化しても、陸羽が茶人に求めたものは変わらぬ普遍性を持っている。

(4) 『茶経』における文学的表現、描写の美しさ。

・『茶経』を文学作品とは言わない。後世に詩人とも称された陸羽は、美しい自然の景物に例える文章、リズムカルな表現を試みる。

・三之造〔餅茶の表面〕の表現

「胡人の鞞くつの如き者は、蹙しゆく然たり。
犂牛ほうぎゅうの臆おそれのごとき者は、廉れん檐せん然たり。
浮雲うきうんの山より出ずる者は、輪りん困こん然たり。
輕けい颺ひょうの水を払う者は、涵かん澹たん然たりetc」

・五之煮〔茶の表面の泡〕の表現

「棗の花の環まるい池の上に漂ひら然たる如く、又た廻り曲くねった潭ふちの渚みぎわに青萍せいへいの始めて生えるが如く、又た晴天爽朗にして浮雲の鱗うろこ然たる有るが如し」。

(5)「四之器」二十四器

風炉（陸羽が茶具に込めた意味）

風炉は鼎形で三本足、それぞれに文字を刻む。

① 最初の足に「坎上巽下离于中」つまり

坎卦 (水)は上、巽卦 (風)は下、离卦 (火)は中。

『易』の理論から、坎と巽の卦を重ねると となり、下から三四五番目が离 となる。上に水、下に風、中に火があること、つまり風炉で湯を沸かすことが『易』に言う宇宙的な根本原理に基づいた構成となる。風炉で湯を沸かすことが「宇宙の原理」に一致するとした。

② 「体は五行を均しくし百疾を去る（体均五行去百疾）」

風炉の次の足には「体は五行（木火土金水）を均しくし百疾を去る」と記される。茶の本体は、五行つまり木（炭）、火、土（灰）、金（金属製の風炉）、水をすべて揃えているため、百疾を去る＝どんな病気も治る、となる。

茶は五行を揃えるため病を除き健康に寄与する、という。

③ 「盛唐が胡を滅した明年に鑄る（盛唐滅胡明年鑄）」

風炉の三番目の足には「盛唐が胡（異民族）を滅した明年に鑄る」と記す。唐王朝が節度使・安祿山（父はソグド人、母は突厥人つまり異民族＝胡）の乱を平定し、平和になったからこそ鑄造できたことを示す。

茶を美味しく飲むには、平和でなくてはならない。

「陸文学自伝」に、陸羽は安祿山の乱後に「四悲詩」を、劉展の乱後には「天之未明賦」を書き、それらを読んだ人々がさめざめと泣いたと記す。

陸羽自身が戦乱に巻き込まれ、故郷を離れ南下する。そうした戦禍を経験したからこそ、悲惨な戦争を慨嘆し平和を希求した。

④ 風炉上部の窓に「伊公の羹、陸氏の茶」と刻む。伊公は、殷初期に羹を作る料理番で湯王に政治を説き、宰相に任ぜられた伊尹。陸羽も伊尹のように、茶で経世済民（人々を救う）の抱負をもっていた。

それは「連句多暇贈陸三山人」（『全唐詩』巻789）の言葉に明らか。

耿湋が「陸羽さん、あなたの一生は墨客だが、永遠の茶仙となった」と。

陸羽は「喜ばしいことは、私が欄干をよじ登りながらも諫言を辞めなかった朱雲のようであることだが、鼎を負い美味しい羹を作り、善政に関与した伊尹のようでないことが恥ずかしい」と。

陸羽は、羹を作りつつ善政に関与した伊尹のようでありたいと願い、理想とした。陸羽が太子文学や太常寺太祝という朝廷からの招請に応じなかったことと矛盾するようだが、陸羽としては宮廷内の役職ではなく、茶や詩文によって善政に関与したい、戦いのない世にしたいと願ったと考える。

(6) 道具の工夫

茶具の材質に、陸羽は日常身边にある木・竹・鉄などの材料を用いた。

風炉の上部には「連葩（花の連続模様）、垂蔓（つる草の模様、唐草模様）、曲水、方文（四角の模様）の類」の模様で装飾し、炭櫃（炭割り）の頭には「小鋸（小さい鋸）」を繋ぐといったちょっとした遊びを加えることも忘れなかった。

茶を美しく見せる道具を選択して、美味しく飲めるよう工夫。例えば青磁の茶碗に茶を淹れると緑に見えて美しいというように。茶器の選択基準を示し、これは今日まで変わらない。

(7) 神仙思想

* 壺居士の『食忌』に「苦茶は久しく食せば、羽化す。蕝と共に食せば、人の体をして重からしむ」とあり。

* (陶) 弘景の『雑録』に「苦茶は身を軽くし骨を換う。昔丹丘子、黄山君これを服す」とあり。

『茶経』七之事は、神仙思想に触れる文を収録するが、盧仝の「茶歌」にある通仙の境地といったことを、自ら詠じるものは見当たらない。むしろ具体的で現実的な事柄を明確に記し、科学的、客観的な姿勢で茶に対峙している。

【『茶経』以外の著作に見る陸羽の思想】

・「僧懷素伝」『全唐文』巻433

草書の名手・僧懷素の人物像と書の本質を描いた伝記として、書道界では知られていた。懷素は家が貧しく、紙がないために芭蕉の葉、漆器の盤や板を紙代わりにして書の修練を積んだ。王羲之などの伝統的書法を学びつつも、それを盲目的に模倣するのではなく、自然現象である風に舞う草、砂、雲の変化などを観察し、そこから独自の書法を創作したとされる。顔真卿が「書は師からの伝授だけでなく、自ら悟るところがなくはない」と論じ、懷素自身も「夏雲の変化」を師としたと語る。ここに「自然から学び、形骸ではなく本質をつかむ姿勢」の重要性が示されている。

陸羽は、懷素が古法の表層をなぞるのではなく、自然と向き合い、自ら考え抜いて技を完成させた姿勢を理想として提示した。この思想こそ、陸羽自身もまた、茶の製法・煮方・飲み方を自然観察と実践に基づいて体系化し、『茶経』で示したものである。

・〈徐顔二家書を論ず〉『全唐文』卷433

徐吏部（徐浩）は右軍（王羲之）の筆法を授け^うないが、体裁は王羲之に似ている。顔太保（顔真卿）は王羲之の筆法を授けたが、点画は似ていない。なぜだろうか。博識ある君子がいうには「おそらく徐（浩）は右軍（王羲之）の皮膚眼鼻を習得した。これが似る理由だ。顔（真卿）は右軍の筋骨心肺を習得した、そこで外観は似ていないのである」と。

役人であり、書家としても称えられた徐浩に対して、ストレートにバツサリと厳しく、陸羽は評価を下す。自伝に述べる通り、陸羽は周囲に^{そんたく}付度することなく自分の考えに従って行動する。そして陸羽自らも、古人の形骸を学ぶのではなく、顔真卿と同様に、古人の筋骨心肺つまり生きる姿勢・志を学ぶ重要性をよく認識し、そうあろうと努めたのであろう。

・〈慧山寺（江蘇省無錫市の寺院）に遊ぶ記〉『全唐文』卷433

此の山はまた猶お人の至行を^と乗り、淳徳を負い、冠裳鐘鼎 無きがごとし。俗に^{ちか}邇く^し多ならざる所となる、宜なるかな。夫れ徳行は源なり、冠裳鐘鼎は流なり。苟も^{いやしく}其の源無ければ、流れ將に^{いづ}安くにか^あせん。

江蘇省無錫にある慧山寺を讚える文の一部。

「慧山寺は善い行いを保ち、素朴で、人情に厚い品性を供え、高位高官の地位や、富貴栄華に満ちた豪華な生活は無い。さりながら俗人から離れず、贅沢でもない。だいたい徳のある行いが源で、富貴栄華に満ちた豪華な生活はその流れ、末端である。その源が無ければ、流れはどうして出てこよう。」ここにも陸羽の「儉」の思想が垣間見える。

・〈六羨歌〉『全唐詩』卷308、『因話録』卷3ほか

羨黄金罍 黄金の罍も羨まず、
不羨白玉盃 白玉の杯も羨まず、
不羨朝入省 朝に省に入るも羨まず、
不羨暮入臺 暮に台に入るも羨まず。
千羨萬羨西江水 千羨万羨す西江の水
曾向竟陵城下來 曾て竟陵城下に向かい来るを

六羨歌は、唐・趙璘『因話録』卷3では、趙璘の幼少時に陸羽の養育者・智積の弟子が、いつもその詩を諷詠していたと回想して記される。『唐国史補』では、養育者・智積の逝去を知った陸羽が詠じた詩と記される。六羨歌にも名利を求めない陸羽の思想・姿勢が窺える。

【他者からみた陸羽】

(1) 唐・封演『封氏聞見記』卷6 飲茶（雅雨堂叢書、學海類編）

楚人・陸羽の『茶論（茶経）』が出た後、「遠近傾慕し、好事者は家に一副を蔵す」ほど広まり、陸羽が創意制定した茶具も二十四も揃えて作られた。

茶そのものも「城市多く店舗を開き、道俗を問わず投銭して飲を取る」。茶店が増加し、誰もが茶を買い、種類も多数あり、荷物が山積し、運ぶ舟車が並ぶ。（陸羽『茶経』が出てから）茶道は盛行し、王公朝士飲ざる者無し。

常伯熊という模倣者まで出て、陸羽のやり方を模倣して、立派な身なりで、手際よく茶を淹れたため、依頼者・李公から評価された。一方、陸羽は野服を^き衣て、茶具を持って入り、常伯熊がやったとおりにしたため、それを見た李公は、内心さげすんで、召使いに命じ銭三十文を取らせ、煎茶博士の報酬とした。陸羽は揚子江のほとりで、知識人や上流の人々と親しく交流していたが、この羞愧(はずかしめ)のため、『^{きちちろん}毀茶論』を著した。

・『封氏聞見記』から理解できることは、『茶経』の影響は同時代でも、小さくなかった。陸羽は上流の人々とも交流したものの、野服を身にまとった陸羽は御史大夫李公から尊重されなかった。陸羽の茶の飲用法は広く受け入れられ、茶具も制作されたが、「儉」の思想は、直ちに誰にでも評価されるものではなかった、のである。

(2) 唐・李肇『唐国史補』 卷中 (津逮秘書)

(陸羽は) やや成長して、自らを易で占い「^{げん}蹇が^{ぜん}漸に^ゆ之く」を得て、そこに「鴻が陸に^{すす}漸む、其の羽は用いて儀と為す可し」とある。そこで姓を陸、名を羽、字を鴻漸とした。陸羽は知識もあり、考えもしっかりして、一物もその妙を盡さないことを恥じ、茶術はとりわけ顕著だった。鞏^{きやうけん}縣(河南省鞏義市)の陶磁器を作る者は偶人をたくさん作り、陸鴻漸と称した。数十の茶器を買えば、一鴻漸をもらう。商人は茶を売って儲からないと、陸羽人形に茶を注いだ。陸羽は江湖(江西省と湖南省)では竟陵子と、南越(広東・広西・ベトナム北部)では桑苧翁と呼ばれた。顔真卿との厚誼は厚く、^{げんしんし}玄真子こと道士の張志和とは友であった。

・『唐国史補』は、唐・^{りちやう}李肇撰。別名『国史補』。開元から長慶年間までの百年間の社会を理解するために重要な価値を持つ。著者・李肇(818年に監察御史)は陸羽より少し後の在世。ほぼ同時代の状況描写。すでに陸羽の名は知られ、陸羽を「文学がある」つまり詩作できるほどの知識人で、茶術に優れると評価。茶が売れるよう祈る対象ともなり、顔真卿ら高官また道士との交流も特記される。

(陸羽煮茶三彩器 2015年5月河南省鞏義市の墓から発見された最古の陸羽像。

晩唐(832年埋葬)の墓の埋葬品 生前の生活を反映。)

(3) 唐・^{きやうりん}趙璘『因話錄』 卷3 商部下 (四庫全書)

太子陸文学鴻漸、名は羽、其の先は何許の人か知らず。竟陵の龍蓋寺の僧、姓は陸、堤上に於いて一初生兒を得て、これを収育し、遂に陸を以て氏と為す。長ずるに及び聡俊にして多能、学は^{ゆた}膽かに^{かいがい}辞は逸、^{ほしいまま}談諧(ユーモア)は弁を^{まんせい}縦に、^{ともがら}蓋し東方曼倩の^{こそうふく}儔なり。余の外祖^{せんじじやう}戸曹府君(外族柳氏)と、交契深至なり。外祖に^{せんじじやう}牋事状有り、陸君の所撰なり。性は嗜茶、始めて煎茶法を創る。(中略)余幼年にして尚お一復州の老僧、是れ陸僧の弟子、常に其の歌を諷して云う

「不羨黄金罍，不羨白玉杯，不羨朝入省，不羨暮入臺。千羨萬羨西江水，曾向竟陵城下來」、又た陸僧を迫感する詩至りて多く有るを記識す。

『因話録』の著者・趙璘は名家の出身。母方の祖父は陝西省の貴族で、陸羽と交流があり、陸羽の人となりや聡俊で多能、学も豊かで言葉は秀逸、ユーモアがあって、話も縦横無尽、東方朔ようだと評価する。孤児として生まれながら、知識人の友人を持ち、彼らから評価される知識を持ち、煎茶法を創始したことも認められていたようだ。

(4) 宋・歐陽脩撰『新唐書』卷196列伝第121 隱逸陸羽

(5) 宋・歐陽脩撰『大明水記』慶曆8年(1048年)外集卷第13・歐陽文忠公集63・記

宋・歐陽脩撰『浮槎山水記』嘉祐3年(1058)歐陽修集卷40・居士集卷40

(6) 宋・石室祖詠・仏教史『隆興仏教編年通論』卷20

・宋代を代表する学者・政治家である歐陽脩は、『旧唐書』では採録されなかった陸羽の伝記を『新唐書』では収録した。

・歐陽脩は『大明水記』『浮槎山水記』で、陸羽『茶経』の水論(山水上、江水中、井水下)を「物理に近し」道理にかなうと評価をしている。宋代になると製茶法も変化し、茶葉を煮るものから抹茶として粉末の茶葉を湯で溶く形式になる。皇帝や貴族に献上する龍團鳳餅のような固形茶が尊重され、茶書は献上茶についてのみ語られるようになる。しかし陸羽を評価する官僚・文化人は存在していた。

・宋代の仏教者の伝記集『隆興仏教編年通論』は、陸羽の明確な没年を記す伝記を採録する。

(6) 明代の『茶経』リバイバル(再評価)

『茶経』の現存最古本は、沈冬梅氏によれば、南宋・咸淳9年(1273)『百川学海』本。

その後約230年間の刊行の空白期があり、明代に入ると『茶経』は注目され、嘉靖21年(1542)には陸羽の故郷・天門で、伝記・詩文・関連資料を含む初の独立刊本が刊行され、以後も万暦期を中心に多数の版本が出版された。

リバイバルの理由

- (1) 茶の形態と飲用法の変化。宋代の末茶・固形茶から、元代以降は散茶・葉茶が普及し、簡便で美味しい喫茶が可能になった。
- (2) 民力の向上と商業出版文化の発展により、嘉靖・万暦年間に書籍刊行が活発化した。
- (3) 宋代の茶書は皇帝献上用の貢茶に特化していたが、明代には皇帝のためではなく、広く多くの人々が楽しむ茶が重視されるようになった。

こうした時代背景のもと、『茶経』は身近な材料を工夫した道具、湯の沸き具合への細やかな配慮など、誰もが実践可能な喫茶の在り方を示す茶書として再評価された。その結果、『茶経』は明代に繰り返し刊行され、中国国内のみならず日本を含む世界へと広く伝播していった。

(7) 日本明治・岡倉天心『茶の本』（1906年）第二章 茶の流派（田中仙堂『岡倉天心「茶の本」をよむ』講談社学術文庫 2017年）

「茶が荒削りな状態から、最終的な理想形へと導かれるには唐王朝の天才が必要であった。八世紀半ばに陸羽が出現して、われわれは茶の最初の伝道者を得た。彼は、仏教、道教、儒教が互いに統合を模索していた時代に生まれた。個の中に普遍が映し出されるのは、当時の汎神論的な象徴主義のせいである。陸羽は、詩人として、茶のもてなしの中に万物を支配する調和と秩序を見出した。茶の規範が、陸羽の有名な著作『茶経』（茶の聖典）の中で作り出されている。」
明治時代の日本人・岡倉天心は、優れた東洋文化を西欧で紹介するための書の中で、陸羽を名人として、「茶のもてなしのうちに万物を支配する調和と秩序を見出した」と評価し綴った。

【まとめ】

陸羽は『茶経』の冒頭で茶を「嘉木」と称え、単なる飲料を超えた品德の備わるものとした。その思想の核は、至善を尽くす「精」と、慎ましく徳を重んじる「儉」にある。彼は官職を辞退しながらも、伊尹のごとき経世済民の志を「茶」という文化や『茶経』という文学に託した。茶器には茶の美味しさの追求と共に、美しさ、健康、平和への願いを込めた。その姿勢は実証的科学的であり、また文学的でもあった。そして俗世を離れず本質を追求する「処士」としての生き方を貫いた。
こうした陸羽の思想は、宋代の欧陽脩に評価されると共に、明代には『茶経』が度々刊行されて、広く伝えられた。世界にも伝播し、日本の「わび・さび」にも「儉」の思想が窺われ、受け継がれると共に、時代を超えて、今なお茶文化の様々な面に規範として大きな影響を与え続けている。

第82回杏雨書屋特別展示会 茶の展示品に関してのご参考まで

『茶の医薬史 中国と日本』岩間眞知子 思文閣出版 2009年

『喫茶の歴史 茶葉同源をさぐる』岩間眞知子 大修館書店（'15.1）第2刷（'20.6）

「日本に伝えられた陸羽伝一五山版『隆興仏教編年通論』陸羽・皎然・道標伝について」

『東アジア伝統医療文化の多角的考察』（'24.2）臨川書店